

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待



【はじめに】

熊本大学では、中期的ビジョンである「熊本大学イニシアティブ2030」にもキャンパスミュージアム構想を掲げ、教育と研究の推進に積極的に活かすとともに、地域や海外にも広く公開・発信し、交流を深めることにより教育や文化の発展に貢献して参りたいと考えています。

このリーフレットは、令和6（2024）年度に、ジアース教育新社出版の「文部科学教育通信（冊子）」において、大学の博物館等の収蔵品等を紹介するページに、連載しました熊本大学キャンパスミュージアム各施設の紹介を1冊にまとめたものです。

多くの皆様にお越しいただき、学び、楽しみ、語り合えるキャンパスミュージアムを推進して参ります。ぜひ皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

熊本大学キャンパスミュージアム推進機構

熊本大学キャンパスミュージアム推進機構へのご支援のお願い

熊本大学キャンパスミュージアム推進機構では、歴史的価値のある文化財の保存・公開を通じて、地域・国内外の皆様へ貴重な学びと交流の場を提供しております。これらの活動を維持・発展させるためには、皆様からの温かいご支援が不可欠です。



寄付金のご案内

目次

熊本大学キャンパスミュージアム	1	工学部研究資料館	13
理事(広報・プランディング、行政連携担当) 宮尾 千加子		大学院先端科学研究部准教授 吉武 隆一	
第五高等学校について	2	埋蔵文化財調査センター 構内遺跡	14
大学院人文社会科学部教授 三澤 純		埋蔵文化財調査センター准教授 大坪 志子	
第五高等(中) 学校本館と表門	3	埋蔵文化財調査センター 縄文時代の遺物と墓	15
キャンパスミュージアム推進機構 藤本 秀子(五高記念館)		埋蔵文化財調査センター助教 山野 ケン 陽次郎	
夏目漱石の祝辞と参観報告	4	熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター	16
キャンパスミュージアム推進機構 藤本 秀子(五高記念館)		地域デザイン部門デジタルアーカイブ室	
第五高等(中) 学校化学実験場	5	大学院先端科学研究部准教授 田中 尚人	
キャンパスミュージアム推進機構 藤本 秀子(五高記念館)		山崎記念館	17
永青文庫研究センター	6	医学部肥後医育ミュージアム研究員 松崎 範子	
永青文庫研究センター准教授 今村 直樹		肥後医育ミュージアム	18
永青文庫研究センター准教授 今村 直樹		医学部肥後医育ミュージアム研究員 松崎 範子	
永青文庫細川家資料	7	熊薬ミュージアム	19
永青文庫研究センター准教授 今村 直樹		大学院生命科学部助教 入江 徹美	
松井家文書	8	大学院生命科学部客員教授 甲斐 広文	
永青文庫研究センター准教授 今村 直樹		熊本大学薬学部薬用植物園	20
文学部附属漱石・八雲教育研究センター	9	技術部技術専門職員 渡邊 将人	
大学院人文社会科学部教授 新井 英永		大学院生命科学部附属グローバル天然物科学研究センター教授 三隅 将吾	
文学部附属国際マンガ学教育研究センター	10	熊本大学薬学部薬草ミュージアム	21
大学院人文社会科学部准教授 日高 利泰		大学院生命科学部助教 Haru Prasad Devkota	
阿蘇家文書	11	大学院生命科学部客員教授 甲斐 広文	
大学院人文社会科学部教授 春田 直紀		旧第五高等学校の生徒募集告知木札	22
熊本大学文書館	12	キャンパスミュージアム推進機構 藤本 秀子(五高記念館)	
文書館特任助教 香室 結美		熊本地震と復旧工事	23
		キャンパスミュージアム推進機構 藤本 秀子(五高記念館)	
		熊本大学キャンパスミュージアム(まとめ)	24
		理事・副学長(人事労務・キャンパスミュージアム担当) 水元 豊文	

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待①

熊本大学キャンパスミュージアム

多くの皆さまや関係機関のご支援・ご協力をいただき、二〇二二（令和四）年三月に、熊本地震から六年ぶりに、五高記念館等、被災していた重要文化財の復旧も完了し展示等を少しずつ再開している。

水と森の自然に囲まれた熊本大学には、キャンパス内に五高記念館（一八八九（明治二十二年完成）のほか化学実験場、工学部研究資料館、表門（赤門）の四つの国指定重要文化財の建造物がある。また、公益財団法人永青文庫から寄託されている肥後熊本藩主・細川家文書や大学所蔵の阿蘇家文書など重要文化財を含む多くの歴史資料群を研究・教育等に活用している。加えて五高で英語の教鞭を取っていた夏目漱石や小泉八雲を調査研究する文学部附属漱石・八雲教育研究センターも有している。

さらには、この夏には新千円札でもお目にかかれる、世界的細菌学者・北里柴三郎（熊本県小国町出身）なども輩出し、常に時代に先駆けてきた肥後医育の伝統と歴史を紹介する肥後医育ミュージアムや熊葉ミュージアムなど多様なミュージアムがある。

現在、小川久雄学長のリーダーシップのもと、これら施設が連携し、キャンパス全体をミュージアムとしてとらえ、人材の育成および研究の推進に資するとともに、開かれた大学として内外に公開・発信していくキャンパスミュージアム構想を、大学の中期ビジョンの一つに掲げ、取り組みを進めている。

文化財や貴重な作品・資料等は、それらを研究し適切な環境下で守り継承し、教育に活用していくことは言うまでもないことだが、



五高記念館



表門（赤門）



肥後医育ミュージアム

一方で国民・住民の宝として多くの方に知っていただく・観ていただくことも重要で、そのことが地域の誇りにもつながり、地域の一員でもある大学の使命でもある。地域の多様な主体と連携・協力し文化等の振興を図り、地域の活力向上に取り組んでおり、資料のデジタルアーカイブの充実や学生アンバサダー等による情報発信なども進めている。

公開・発信と研究・保存は相容れない点もあり、公開方法の工夫も必要だが、歴史と緑豊かなキャンパスを散策し、学び、楽しんでいただけるような開かれたキャンパスミュージアムをさらに進めていきたい。多くの皆さまのお越しをお待ちしている。

※能登半島地震の被害に遭われた方々に哀悼の意を表し、お見舞いを申し上げます。一日も早く平穏な日々が戻りますよう心から願うとともに、金沢大学や富山大学はじめ被災された教育機関の復旧・復興をお祈り申し上げます。

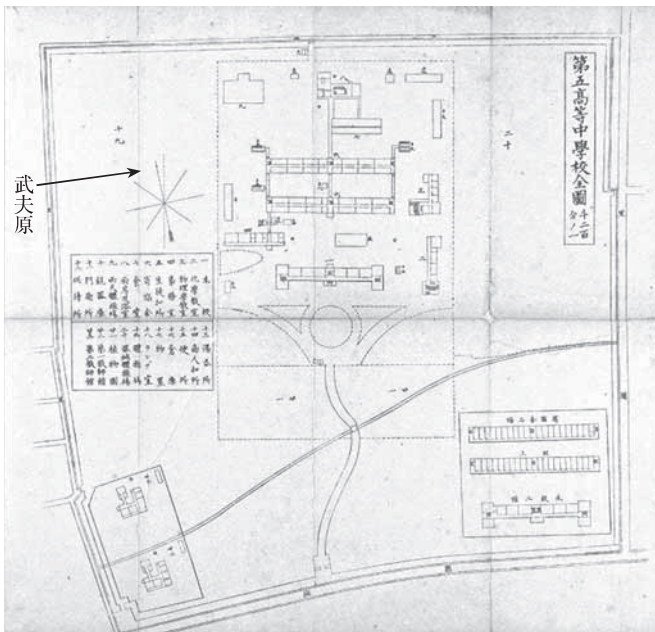
熊本大学理事（広報・ブランディング、行政連携担当） 宮尾千加子

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待②

第五高等学校について



開校当時の本館と正門



開校当時の第五高等学校の校内図

第五高等学校は、熊本大学の包括校の一つである。五高は、一八八六（明治十九）年四月に発令された中学校令に基づく第五高等学校として設置された。この時、第一から第五までの高等学校が、それぞれ学区を定めた上で同時に設置されたが、それ以前に前身校があった第一・第三はすぐに設立地が確定した。しかし、そうではなかった三つの学校は出遅れることになった。特に、第五は九州各県の誘致合戦が激しく、熊本に確定したのは一八八七年四月で、五つの学校の中で最も遅かった。そのため一回目の入試は同年十月、入学式は十一月にまで遅れ込んだ。この間、旧熊本藩士たちが、旧藩主細川家の協力を得つつ、資金調達を含めて積極的な誘致活動を行ったことはよく知られている。その代表格である井上毅は、当時、明治政府の中にいて大日本帝国憲法の起草作業に忙殺されていたが、その合間を縫って、故郷のために各方面と連絡を取り合っていた。その結果、同年一月、森有礼文部大臣の九州視察が実現し、最

終決定に至った。当初、旧熊本城内にあった仮校舎から、飽田郡黒髪村の校地（現熊本大学黒髪北キャンパス）に引越してきたのは一八八九年のことである。その後、一八九四年に発令された高等学校令により、第五高等学校と改称された。

五高は、開校と同時に長崎に医学部を置いたが、これは一九〇一（明治三十四）年に長崎医学専門学校（現長崎大学医学部）として独立した。また一八九七年には熊本に工学部を開設したが、これも一九〇六年に熊本高等工業学校（現熊本大学工学部）として独立した。

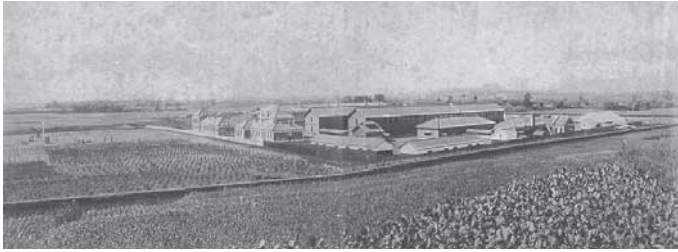
このように五高を含む旧制高等学校は、当初は専門教育の場としての役割を担ったが、次第に帝国大学進学希望者のための高等教育機関として発展し、エリート候補たる青年たちの学び舎となった。誇った。若き日に五高で教鞭を執った夏目漱石は、代表作『三四郎』の主人公・小川三四郎を五高卒業生として描き、「熊本の高等学校にいる時分も（中略）月見草ばかり生えている運動場に寝たりして、全く世の中を忘れた気になった事は幾度とある」と語らせている。地図に見るように、この「運動場」は「武夫原」と呼ばれ、今も熊本大学の学生たちに親しまれている。数ある五高寮歌の中で、最も有名な「武夫原頭に草萌えて」も、ここに由来する。

五高は、一九五〇（昭和二十五）年に閉校式を行うまで、五中時代も含めて約一万三千人の卒業生を送り出したが、その中には池田勇人・佐藤栄作両首相をはじめ、政界・官界・財界・学界の勿々たる人物たちがいる。現在、旧五高本館（重文）は五高記念館として、熊本大学のシンボルとなっているが、旧制高等学校の本館が、建設当初の場所にそのまま、しかも豊富な学校資料とともに現存している点で、極めて貴重な「歴史の証人」となっている。

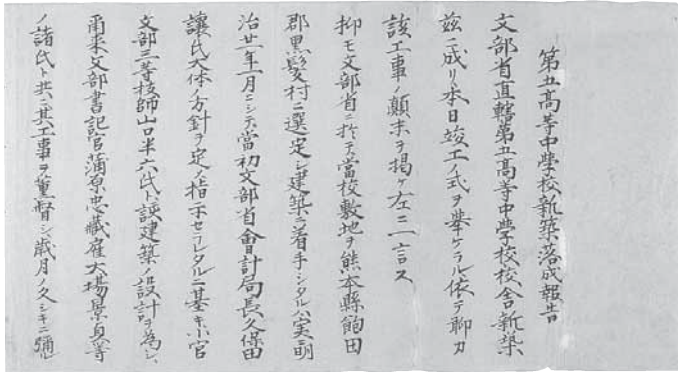
熊本大学大学院人文社会科学部教授 三澤 純

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待③

第五高等(中)学校本館と表門



竣工当時の様子を敷地背後から撮影 寮や物理実験場などが見える
1889(明治22)年頃



久留正道による『新築落成報告』(部分)

現在、熊本大学五高記念館として公開している建物は、旧制第五高等中学校の本館として建設され、第五高等学校(名称変更)、熊本大学へと引き継がれた後も、教室や研究室として使用されたものである。

一八八七(明治二十)年に、熊本に第五高等中学校を置くことが決定され秋に開校したが、当初は熊本城内の仮校舎で授業を行った。同年十月に現在地が学校用地と決まり、一八八八(明治二十一年)二月起工、翌一八八九(明治二十二年)八月に竣工し、仮校舎から移転した。

建物は、南を正面とした赤れんが造二階建、東西に長さ八〇m、幅約一〇m、軒高は九・六mという規模を持ち、建物中央と両翼に

突出部を持つ左右対称形を成している。中央突出部を玄関とし、玄関正面に中央階段が設置されている。一・二階共に、この中央階段を挟み廊下に面した教室が東西一列に並んでいる。廊下は、南国の強い日差しに配慮して南側に設けられ、教室は北窓を南側よりも多く設け、安定した光をより多く取り入れる仕組みになっている。内壁は、主に鼠漆喰で仕上げられ、廊下上部や教室内の天井近くに白漆喰仕上げの部分が見られる。外観は赤れんがの壁に石造の白いボーダーが五本配され、単調さを防ぐと共に建物の横のラインを強調するデザインとなっている。

建設は文部省の直営で行われ、設計と監理は、文部省三等技師山口半六と同四等技師久留正道による。山口は、日本で最初の技術系留学生としてフランスで造家学(建築学)を学び、久留は工部大学校で造家学を学んだ。この二人の手によって第一から第五までの高等中学校や東京音楽学校の建物が造られている。現場の作業を担ったのは地元の職人たちであり、熊本で初めてとなる西洋風の赤れんが建築を見事に造りあげた。これらの人々の名前は本館に納められた棟札に記されているが、それは縦二・二八mという大きなもので、建設にあたった人々の気概や誇りを感じさせる。

学校施設の完成を祝って行われた一八九〇(明治二十三年)の「開校記念式」は、九州各県からの来賓を迎え、見物の市民が詰めかけるなど賑々しく執り行われたが、その席上、参列した久留正道が『新築落成報告』を読み上げ、敷地建物の全てが学校側に引き渡された。以後、毎年十月十日は開校記念日として祝うこととなり、記念式典のほか、寮の公開や運動会、音楽会などが行われた。

現在も大学の門の一つとして使用されている表門は、本館と同様の赤れんが造で、計画された段階では脇門を持つ形だったが、実際には脇門は造られず、門扉も設けられなかった。この門は、旧豊後街道(現 県道三三七号線)に面しており熊本市民にも「赤門」として親しまれている。

本館と表門、化学実験場は、一九六九(昭和四十四)年に重要文化財に指定されたが、その際には、当初図面として残されている四〇枚の彩色図面も附指定された。

熊本大学キャンパスミュージアム推進機構 藤本秀子(五高記念館)

夏目漱石の祝辞と参観報告

作家 夏目漱石が松山市（愛媛県）に住んでいたことは、代表作の一つである『坊っちゃん』の舞台となっていたことからよく知られている。一方で『草枕』や『二百十日』の舞台となった熊本県に住んでいたことは、どれほど知られているだろうか。三作品とも、一九〇六（明治三十九）年に発表された百年以上前の作品だが、ユーモアに溢れ、若い日の必読書としてあげられることの多い『坊っちゃん』に比べ、他の二作品はどうなのだろう。

一八九六（明治二十九）年四月、夏目漱石（本名 金之助）は第五高等学校の英語教授として赴任するため熊本市へ赴いた。この時から、四年三ヶ月を熊本で過ごすことになる。正式には、英国留学から帰朝し、依願免本官（退職）となる一九〇三（明治三十六）年三月まで在籍した。

さて、一教師として教鞭を執った日々は、学務や学校行事に追われる日々でもあったが、五高記念館には、その記録とも言える数々の資料が残されている。その中から二点を紹介したい。

一つは、一八九七（明治三十）年十月十日に行われた「第七回開校記念式」において教員総代として読み上げた『祝辞』である。本紙の大きさは縦二〇三mm、横一一一五mmである。昨年度修復を行い、事前に卷子装になっていたことから今回も卷子装に仕上げた。

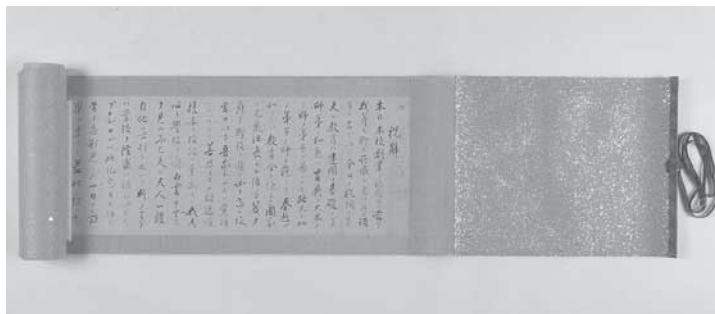
祝辞は、「夫（ソ）レ教育ハ建国ノ基礎ニシテ師弟ノ和熟ハ育英ノ大本タリ……」と始まり、教育が国づくりの根本であることや、教育による人材育成には、教師と生徒との信頼関係が最も大切であることを述べている。現代でも通用する教育の理想と言えよう。開校記念式は、一八九〇（明治二十三）年に学校施設全体の竣工を祝って行われた「開校記念式」を、毎年の行事としたものであるが、席上、教員、生徒が代表を立てて祝辞を述べた。

もう一つは、『佐賀福岡尋常中学校参観報告書』で二二枚の半紙を二つ折りにして冊子状に綴じてある。これは、毎年、第五高等学校と学区内の尋常中学校の代表者を集めて開催された「第五地方部高等学校及尋常中学校協議会」

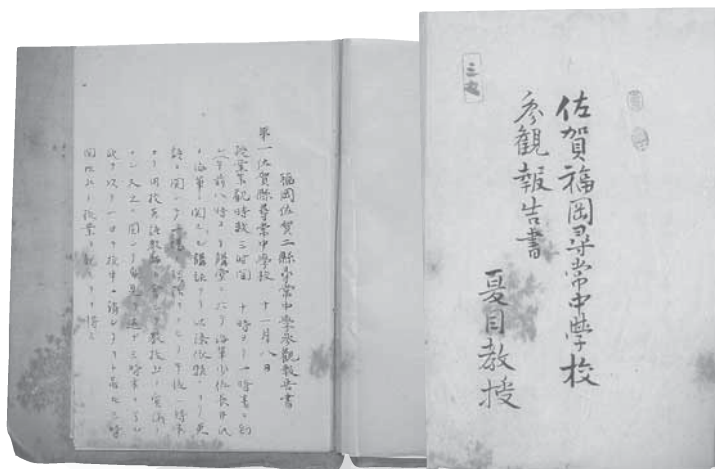
のための資料であり、協議会で選定された尋常中学校の授業の様子などを参観し、報告書としてまとめたものである。

一八九七（明治三十）年十一月八日から十一日まで参観に赴いた先は、「佐賀県尋常中学校」「福岡県尋常中学校修猷館」「福岡県久留米尋常中学校明善校」「福岡県尋常中学校伝習館」の四校である。各校とも各学年ごとに使用している教科書名や教師の指導法、授業程度、生徒の様子などを簡潔にまとめてあり、当時の尋常中学校の英語の授業の様子も垣間見ることが出来る。この翌年の暮れに開催された協議会では、英語科教授として英語の入学試験結果の概略を報告しているが、受験生の英語力について、事例を挙げながら、その低下を憂慮する内容になっており、一教師としても、英語教育に真摯に取り組む漱石の姿を知ることができる。

熊本大学キャンパスミュージアム推進機構 藤本秀子（五高記念館）



夏目漱石（金之助）が「開校記念式」で読み上げた祝辞



佐賀福岡尋常中学校参観報告書

第五高等(中)学校 化学実験場

旧第五高等中学校の学校施設として本館のほかに化学実験場と物理実験場が赤れんが造りで建設された。この内、化学実験場が現存している。

化学実験場は、一八八八(明治二十一年)五月に起工し、一八八九(明治二十二年)十二月に竣工した。

建物は、南北に長く、西側と北側に出入口を持つ、赤れんが造平屋建、南北に長さ約四三m、幅約一五m、軒高は最高で約八mとなっている。平家ではあるが、内部に階段教室を有しているため、軒高は通常の二階建てほどに高くなっており、西側に配された廊下に面して実験室や天秤室、準備室などが並び、南の端には階段教室が配置されている。

化学実験場を特徴づけるのは、階段教室とドラフトチャンバーの存在である。

階段教室は、間口約九m、奥行約九・五m、天井高約六・五mという、かなり大きな空間である。座席は、南側を背にして六段の長椅子席が設けられ、それぞれの段の背板が一つ上の段の机部分と一体化する造りとなっている。一段あたり一二人が着席することを想定していたようであるが、それぞれの段は、三席、六席、三席と三列に分離され、間が階段となっている。また、座席の後部は踊り場になっており、南西端に設けられた出入口へつながる階段になっている。

同時代に建設された第四高等学校の物理化学教室(現在は愛知県犬山市の博物館明治村に移築)に比べると、教室面積や席数、踊り場や後部の階段などを持つ点で余裕のある造りになっている。

ドラフトチャンバーは、



化学実験場外観



階段教室



ドラフトチャンバー (撮影 星野雅俊)

化学実験を行う際に発生する有毒な気体を排出させるための装置である。現代のドラフトチャンバーには、電気による強制排気の仕組みが採用されているが、この実験場が建設された当時は、未だ、電気の使用は無く、ガラス戸で覆われた実験台が煙突に直結されているにすぎない。ただ、煙突に繋がる排気口のすぐ上にアルコルランプを置き、その上昇気流により排気を促すという仕組みが組み込まれたドラフトチャンバーが二台設けられ、そのうちの一台が現存している。これは、日本最古の排気システムを持つドラフトチャンバーとされている。

化学実験場も本館と同じように建設当時の図面が残されており、階段教室の構造やドラフトチャンバーの仕組み、現在では失われてしまった木製実験机や石造実験台のデザインなども知ることができ

る。

化学実験場と当初設計図は、本館と同時に重要文化財並びに附指定になっているが、二〇一四(平成二十六)年には、公益社団法人日本化学会の第五回化学遺産に認定され「認定化学遺産 第〇二五号」となっている。

熊本大学キャンパスミュージアム推進機構 藤本秀子(五高記念館)

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待⑥

永青文庫研究センター

熊本大学永青文庫研究センターは、永青文庫資料等の総合的研究に立脚した拠点的研究の組織、文化行政機関等との連携による地域文化振興への貢献、人文社会科学系分野を中心とした研究及び文化振興の発展に寄与する人材育成に資することを目的とした施設である。二〇〇九（平成二十一）年四月、熊本大学文学部を中心とした永青文庫資料研究の一定の蓄積を前提に、公益財団法人永青文庫や熊本県教育庁の要請を受けて設置された。現在は、概算要求機能強化促進分プロジェクト経費、科学研究費補助金、肥後銀行が出捐している熊本県永青文庫常設展示振興基金等をもとに運営されている。当初の八年間は文学部附属であったが、熊本大学の特色ある重点領域として、その研究・社会貢献事業の一層の拡充がはかられることとなり、二〇一七（平成二十九）年四月に学内共同教育研究施設へと改組された。

本センターの活動は、おおよそ次の三点にまとめることができる。

第一に研究活動である。近世大名細川家に伝来し、公益財団法人永青文庫が所有する「永青文庫細川家資料」の細目録作成事業のほか、細川家第一家老の松井家に伝来し、熊本大学が所蔵する「松井家文書」、熊本藩の惣庄屋を歴任した古閑家に伝来し、熊本大学が管理する「古閑家文書」などの目録作成事業を進めている。そこで得られた知見は、永青文庫資料等から学術的価値が高い古文書類を図版入りで刊行した資料集『永青文庫叢書』全一〇冊やセンタースタッフによる研究、後述する地域・社会貢献事業等に反映されている。また、学内外の研究者とともに、右の熊本藩関係資料群を素材とした共同研究を継続的に進めており、日本近世史研究の全国的な拠点の一つとなっている。

第二に教育活動である。上記の目録作成事

業等に学部生や大学院生を参加させることによって、歴史資料学の専門性と実践力を身に付けた人材の養成を目指している。本センターの事業に従事した卒業生・修了生の多くは、現在、日本中・近世史の若手研究者や文化財行政担当者として全国各地で活躍している。

第三に、地域・社会貢献事業である。熊本大学附属図書館と連携した貴重資料展、永青文庫セミナーを毎年秋に開催するとともに、永青文庫をはじめ、熊本県立美術館・八代市立博物館未来の森ミュージアム等、県内外の博物館・美術館と連携した展覧会や講演会等も頻繁に行っている。マスコミを通じた研究成果の普及にも積極的に取り組んでおり、とくに稲葉継陽センター長は、テレビ出演や地元紙『熊本日日新聞』への寄稿や連載を通じて、本センターの基礎研究の成果を随時発信している。

熊本大学永青文庫研究センター准教授 今村直樹



永青文庫研究センター外観



第16回永青文庫セミナーで講演する稲葉継陽センター長
(2022年11月)

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待⑦

永青文庫細川家資料

熊本大学附属図書館には、近世初期から廃藩置県まで熊本藩を治めた近世大名細川家の歴史資料、書籍、絵図・地図等が寄託されている。これらは、廃藩直後から細川家の菩提寺（妙解寺）跡に置かれた細川家北岡邸の蔵で保管され、西南戦争や太平洋戦争などの危機を潜り抜けてきた。一九六四（昭和三十九）年、財団法人永青文庫から熊本大学に寄託されている。これが、全国屈指の大名家資料群たる「永青文庫細川家資料」の来歴である。永青文庫研究センターの総合調査により、その総点数は約五万七七〇〇点に達することが明らかになった。

細川家資料には、膨大な分量はもちろんのこと、資料群の構成面でも他の大名家資料群にはない際立った特徴がある。それは、充実した「藩侯の資料」と、ほぼ完全なたちで伝来した「藩庁の史料」の存在である。

室町幕府將軍直臣を出自とする細川家の「藩侯の資料」には、織豊期以降に取り立てられた多くの大名家にはない重要資料を見出すことができる。例えば中世細川家文書群には、肥後細川家の祖と位置付けられた和泉守護細川家の家蔵文書群や、多数の織田信長発給文書が含まれている。室町時代の守護大名家文書の存在は大変貴重である。また、唯一の確実な信長自筆文書を含む五九通の信長発給文書は、一所に伝来した信長文書として最多である。これら中世文書群等二六六通は、二〇一三（平成二十五）年に国の重要文化財に指定された。

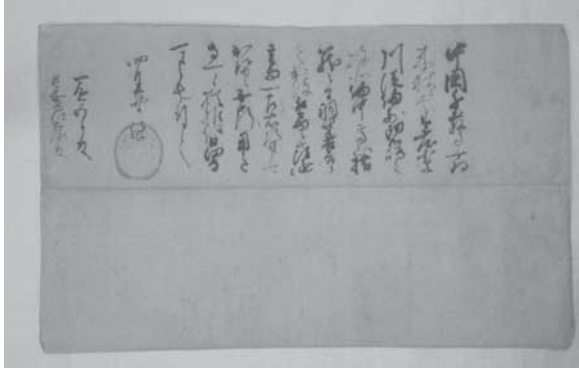
一方、「藩庁の史料」は、他の大名家ではその大半が廃藩後に散逸したにもかかわらず、細川家の場合、近世初期から廃藩までのほぼ毎年の藩政史料が伝来している。とくに寛永期（一六四〇年代）までの初期藩政史料が大量に残されている点は極めて稀である。家臣からの上申書・政策原案等を藩主細川忠利らが決裁した文書は、じつに二〇〇〇点を超える。こうした藩主の決裁行為は、やがて限定かつ形式化されていき、十八世紀半ばの藩政改革を経て、中央政庁としての奉行所の機能が強化され、その下の各行政部局に膨大な記録

史料が蓄積されていった。郡方（地方行政部局）の年次記録たる「覚帳」、選挙方（人事部局）のそれである「町在」などは、十八世紀後半以降の藩政史料を象徴する存在である。

近年、このような細川家資料の伝来過程も明らかになりつつある。信長発給文書を例にあげれば、信長死去から約六〇年後、当時の藩主忠利らの努力で、細川家関係者をはじめとする諸所から熊本に集約された事実が判明している。また、「藩庁の史料」も廃藩直後に散逸の危機に直面するが、旧細川家家臣たちが自費で買い集めるなどして、前述の細川家北岡邸の蔵に収められることになった。彼らの動機とは、優れた統治実績を誇った熊本藩細川家の歴史をどうか後世に伝えたい、というものであった。

このように細川家資料は、先人たちの大きな努力、そして幸運に恵まれることで、熊本の地に伝来している。そして私たち自身も、この稀有な資料群を保存・活用し、未来の世代に継承するという、重要な責務を負っていることを忘れてはならない。

熊本大学永青文庫研究センター准教授 今村直樹



（天正 10 年）4 月 24 日付織田信長朱印状



永青文庫細川家資料「藩庁の史料」

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待⑧

松井家文書

熊本大学附属図書館に架蔵されている松井家文書は、熊本藩の第一家老であった松井家に伝来した古文書群である。その総点数は約三万六〇〇〇点であり、同館に寄託されている永青文庫細川家資料（約五万七七〇〇点）に匹敵する規模をもつ。同館は、熊本藩の藩士・豪農・庄屋などの家に伝来した古文書群も所蔵しており、熊本大学には大名・家老から藩士・庶民層に至るまで、近世熊本の社会全階層の資料群（約一〇万点）が揃っている。このような充実した近世資料群を有する研究機関は、全国的にも熊本大学をおいてほかにない。

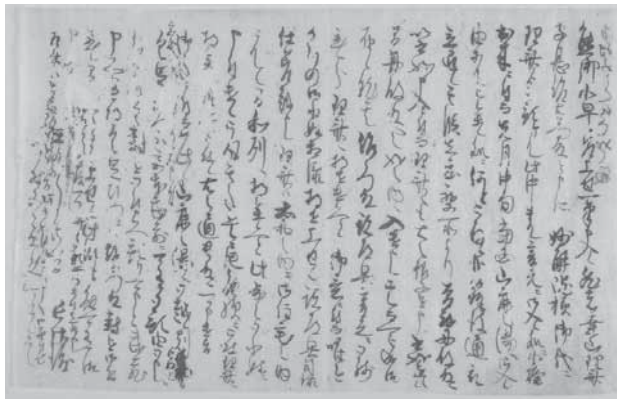
松井家は、戦国時代、室町幕府將軍足利家の直臣であったが、室町幕府が滅亡すると元同僚であった細川家に仕えた。信長・秀吉・家康という天下人のもと、細川家は近世大名として成長していくが、それを家老という立場から支え続けたのが松井家である。細川家が肥後熊本に入国すると、家中最大の知行高三万石を与えられ、一六四六（正保三）年からは薩摩藩島津家への最前線基地であった八代城主となり、明治維新までその役目を全うしている。このような松井家には、戦国時代から幕末維新期にかけて日本史上重要な資料が伝来することになった。松井家の歴史資料のうち、いわゆる「御家の資料」に関しては、熊本県八代市の財団法人松井文庫が所蔵管理を行っている。他方、家老としての職務遂行の過程で作成された藩政文書群に関しては、昭和三十年代に松井家から熊本大学に移管された。これが松井家文書である。

熊本大学永青文庫研究センターは、二〇一八（平成三十）年から松井家文書の総合調査を進めているが、この間、日本近世史研究を前進させる新事実が相次いで発見されている。そのうちのひとつが、日本史上最も著名な剣豪とされる宮本武蔵の晩年の人物像を示す史料（松井興長書状控）である。本史料からは、当時の武蔵が藩主の政治思想に影響を与えうる兵法家として、細川家に集っていた他の文化人とも良好な関係を築いていたことが明らかとなり、「孤高の剣客」という

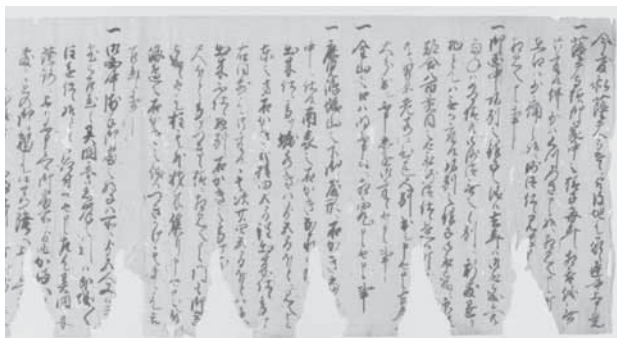
イメージとは異なる人物像が浮かび上がってきた。また、一六五一（慶安四）年に細川家から薩摩国に派遣された密偵の報告書からは、鹿児島城普請工事の状況や薩摩藩領における浄土真宗取り締まりの実態など、初期薩摩藩政に関する多くの未知の情報が記載されていることが判明した。

永青文庫研究センターは、熊本大学附属図書館と連携し、保存状態が悪い松井家文書の修復事業も進めている。右で述べた宮本武蔵関係の新史料も、二〇一九（令和元）年に修復されたものである。松井家文書の修復費用等を調達するため、二〇二三年から二〇二四年にかけて附属図書館が行ったクラウドファンディングでは、全国から目標額を超える多額の寄付が集まった。松井家文書の総合調査と修復事業は現在も継続中であり、さらに今後は文書の精密画像データが、国際規格に対応した新たなデジタルアーカイブを介し、世界に向けてインターネット公開される予定である。

熊本大学永青文庫研究センター准教授 今村直樹



（寛永19年）閏9月27日付松井興長書状控



慶安4年2月27日付村田門左衛門申上覚（冒頭部分）